



風林火山

井上靖

Roman Books

井上靖



Roman Books



昭和41年 4月5日 第1刷発行
昭和44年 3月15日 第8刷発行

風 林 火 山

230円

著 者 井 上 靖
発行者 野 間 省 一
発行所 株式会社 講 談 社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112
振 替 東 京 3 9 3 0
電話東京(942) 1111(大代表)
印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 有限会社 馬場製本

© 井 上 靖 昭和三十三年

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

Printed in Japan

井上靖



Roman Books

装
幀
山
口
源

風
林
火
山

一章

青木大膳と言う三十前後の浪人者については、誰もその前身を知っている者はなかった。今川義元の居館のある駿府すんぷの城下へ流れ込んでから一年になるが、もと北条の家臣であつたということ、素行が修まらず、何か大きな失策をしかして主を失つたということと以外、誰も彼についての知識は持ち合わせていなかった。

今川の家臣たちも、青木大膳と道で会うと、大抵の者が彼を避けた。何かしら厭なものを彼はその面にも

姿態にも持っていた。顔は青白く、眉間には傷があり、脣は薄く、歩く時長身の左肩が少し上がった。どちらかと言えば整った顔だちだったが、容姿風態のどこかに残忍なものがあつた。

腕は凄く立った。何流の使手と言うのか知らないが、一撃で必ず相手を倒す殺気を帯んだ素早い太刀の使い方だった。

この春、城内の広場で試合があり、浪人者も飛入りを許されたが、その時、大膳の腕前は拔群だった。誰も彼の右に出る者はなかった。十何人の腕自慢の武士たちが、殆ど一撃のもとに叩き伏せられた。いずれも木刀で下から胸を突き上げられ、仰向けにのけ反つた。一人は血を吐き、他の全部が多かれ少かれ手傷を負つた。浪人者青木大膳の名は、その時以来相当有名になつたが、今川家からは仕官の沙汰はなかった。それだけの腕を持ちながら、何となく信用されぬ、人から疎まれるようなものを彼は身につけていたのである。

その日、青木大膳は暮方、彼が食客となっている屋形町の一軒の武家屋敷を出た。玄関口を出る時、小者が何か言葉をかけたが、いつものように返事をしなかった。小者はその家の主人の帰宅を知らせたのであるが、彼は聞えたのか、聞えないのか、不貞腐った歩き方で裏木戸の方へゆっくりと足を運んだ。裏木戸へ廻ったところを見ると、小者の言葉が耳に入り、主人と顔を合わせるのを避けたのかも知れない。

半刻程経った頃、彼は安倍川のほとりを、やはり同じ歩き方で歩いていたが、やがて川が大きく屈曲しているところから堤を下に降り、二三軒の農家の背戸を通じて、竹藪の横手の破れ寺に入って行った。

「居るか」

玄関の板敷のところでは低く声をかけたが、返事のないのを知ると、そのまま木戸を開けて狭い中庭へ廻った。雑木が植わり、飛石がごちゃごちゃと配せられている。

「居るか」彼はまた声を掛けた。部屋の内部に人の気

配があるのを知ると、彼は縁側に腰を降した。

「誰だ」少し皺枯れた低い声がした。

「青木大膳だ」

彼は横柄に答えた。内部からは、それに対して返事はなかった。

「青木大膳だ」

また彼は言った。眼は、この二三日急につめたい光を帯んで来た陽に耀いている庭の雑木に当てられたままである。

と、傍でかちりと音がした。見ると小判が一枚、彼の腰かけている傍に落ちていた。彼はそれを手に取ってちらっと眼を当てた。面に蔭目かげめがあつて、下に桐の極印して、その内側に駿河の文字がある。

「一枚か」

青木大膳は鼻でせせら笑うと、

「騙り者奴が！」憎々しげに言った。

「武者修行が聞いて呆れる。諸州を経廻り、国々の風俗を知り、要害の絵図を調べ、地理に能く通達しか！」

それから大膳は、言葉の調子よりずっと低い声で笑った。軽蔑の気持がむき出しにされた厭な笑いだった。彼は平生めったに口をきかず、無口で通っていた。併し、ここでは、彼の方が口をきいている。

「騙り者奴が！ 兵法とはよくぬかしたな。城取り、陣取り、兵法の奥秘を極める。その上剣術は行流の使手か！ 行流というものの腕前を見せて貰いたいものだ。いつでも青木大膳、相手になって仕わす」

依然として、内部からは何の返事もなかった。すると、いきり立ったように彼は言った。

「もう一枚出せ！ 同じ浪々の身でも、貴様の方は、世人をたぶらかして、俺に較べるとずっと工面がいい。もう一枚出せ！」

すると、障子の隙間から投げられたのであろう、また一枚の小判が、小さい音をたてて縁に落ちた。

「貰って行く。騙り者の面の皮をひんむくのは、十日程伸ばしてやる」

青木大膳は立ち上がった。それから、

「今日は急ぐ。夜、甲斐の武田の重臣に会って身売りの交渉をせねばならぬ。駿府の城には愛想をつかしたわい」

棄台詞を残して、青木大膳が二三歩歩き出した時だった。

「待て！」

と、皺枯れた声がかかった。

「何か用か」

「武田の重臣と言ったな。誰だ？」

「おぬしも氣になると見えるの。侍大将板垣某^{なにがし}。名前などは知らん」

すると、暫く間を置いてから、

「やすやすと仕官ができると思っているのか」

皺枯れた声は言った。

「そんなことは知らぬ、当ってみるまでだ」

青木大膳が更に二三歩歩いた時だった。障子が開いて、膝行^{ひざぎ}するようにして出て来たのは、ひどく小柄な人物だった。顔つきから体つきまで全部異様だった。

「用か？」

青木大膳は振り返った。

「智慧を授けて仕わす——いいか、板垣と言えば、板垣信方であろう。代々板垣は武田家の族臣で重きをなしている。現在、甘利虎泰と板垣信方とを、武田家の両職となす。浪人者の売り込みなどにうかうかと乗る人物ではない。ただ一つ方法があるだけだ。いいか、貴公、その板垣信方を襲え！」

「襲う!? 襲って、何とする！」

「知れたことだ。貴公が襲って危いところを拙者が救う」

青木大膳はその相手の言葉の意味が、急には呑み込めなかった。すると、小男のこの家の主人はまた続けと言った。

「それで拙者と板垣信方とは、ある関係ができる。人間、生命を助けられるより大なる恩義はないからな、拙者も武田家に仕官を望んでいる。拙者が武田に迎えられる時、俺は貴公をも推薦する」

「芝居か」

青木大膳はぱっと唾を吐き、それから相手を見詰めた。

「併し、これ以外、確実な仕官の道はあるまい」

「騙り者奴！」

「嫌なら行くがいい」

青木大膳は暫く考えるようにしていたが、やがて縁側の方に引き返して来ると、

「本性を現したな。めっかち！」

縁側に端坐している人物の眼はなる程すがめである。どこを見ているか判らない。

大膳が縁側の方に戻って来ると、縁側の人物は右手を縁側について腰を上げた。縁に当たった手の中指が欠けている。やがて、すうっと立ち上がったが、ひどく背が小さかった。到底五尺はない。小男は座敷に入った。

青木大膳は傍若無人に笑った。が、座敷に入った人物は笑わなかった。少し暗い部屋内で庭の赤い菊の花

の方にいつまでも顔を向けている。併し、大膳は相手がどこを見詰めているか確とは判らなかつた。

「人を傷めぬように襲うのは、ちと難しいのう、青木大膳、初めてじゃ」

彼は言つたが、部屋の人物は再び前のように口をきかなくなつていた。

「何とか言え！ 言わぬか 山本勘助！」

激情に襲われて、大膳は大喝した。蒼白な顔が急にひき攣^つつた。

「少々傷めてもいい、ただ殺されては困る。もとも子もなくなる！」

部屋からは、落着いた皺枯れ声がかかった。

青木大膳は山本勘助が嫌いだった。半年程前初めて会つた許りだが、その時からこの人物を憎んでいた。

性が合わないとも言ふか、この男の声を耳にする^と、むしろ、相手を苛めて苛めて苛め抜き、ぐうの音も出ないようにしてやりたい欲望を感じた。従つて、大膳が山本勘助の家を訪ねるのは金の無心もあつ

たが、それより訪ねて行く心の底には、むしろ彼に厭がらせを言う欲求の方が強く働いていた。

浪人山本勘助の名は、駿遠参の今川家の領地では相当広く知れ渡つていた。参州牛窪の浪人で、駿府へ来たのは、九年前である。この九年に度々今川家へ仕官を申出ているが、どういふものか、未だに採用されず、現在は、今川家の家老庵原忠胤の庇護を受けて徒食している。庵原忠胤が長年に亘つて勘助に米塩の資に事欠かぬだけの面倒を見ているのは、勘助と忠胤が親族関係であるからだ^と、世間では取沙汰している。若しそうでなければ、今川家で仕官も許されない、謂わばその人物も器量も認めない者を、家老の忠胤が面倒を見る筈はないと言うのである。

剣は行流の使手で、今川家の家臣の中で彼に立ち向えるものはないと噂されている。併し、誰も実際に彼が剣を執つたのを見たこともなければ、戦場に臨んだ話も、人を殺傷した話も聞いていない。恐らくこの行流の使手であるという噂の蔭には、彼の異相がかなり

大きな役割を勤めていると思われる。

身長は五尺に充たず、色は黒く、眼はすがめで、しかも跛である。右の掌の中指を一本失っている。年齢は既に五十歳に近い。

彼が己が家を出て城下を歩くことは、一年のうち数える許りであるが、そんな時幼童は振向くが、大人は振返らない。彼の無慚な面貌風姿は、ある不気味さと痛々しさを兼ね備えている。幼童も振向くだけで、さすがに怖いのか彼のあとをついて歩くことはしない。

彼は、二十歳の時から全国各地を経廻り、軍旅に長じ、古今の兵法に明るく、城取り、陣取りの達人とされている。それにも拘らず、今川家仕官の儀が成立せず、九年も浪々の身であることは、むしろ逆に彼の盛名を高からしむるに役立っている。彼の頭脳と経験と才氣をそねむものが府中の屋形様（義元）の側近にあり、その勢力に依って、彼の仕官は執拗にはばまれていたというのが、一般の取沙汰である。近年はその妨害者が彼の庇護者庵原忠胤その人であるという噂さえ

生れていた。

併し、兎に角、今川の家臣の者でも、こっそりと山本勘助の家を訪ねる者は少くなく、夜になると、彼の居宅は宛ら私塾の觀を呈すると言われている。

ただ青木大膳だけは、山本勘助に関するあらゆる風評を信用していなかった。騙り者め！ 彼はそう思い込んでいた。併し青木大膳は、山本勘助の盛名のあらゆる要素を分析して、それについて疑惑の眼を向けているわけではなかった。彼が山本勘助を信用していないのは、彼の直感に依ってであった。山本勘助が、刀を執って立ち上がっている姿は、どうしても彼の眼に浮かんで来なかった。むりに思い浮かべると、それは颯爽としたところの微塵もない、頗る珍妙なものであった。

青木大膳が山本勘助に初めて会ったのは、半年程前であるが、一眼彼を見た瞬間から、彼はこの人物を信用しなかった。劍の使手という者は、こんな人物ではないと思った。彼と一度仕合して化けの皮をひんむい

てやりたいと思った。大膳は何回か勘助に剣を執らせようとしたが、絶対に相手は彼の要求に応じなかった。その度に、何だかんだと器用にはぐらかされて、逃げられていた。

大膳は、時々、思い出したように山本勘助の家を訪ねて悪口雑言を吐いた。それでも勘助は黙っていた。勘助に対する蔑みと憎しみが、青木大膳には、いつか浪々の貧しい退屈な生活の中での、唯一の生き甲斐のようなものになっていた。兵法や諸国の事情については、大膳自身何の知識も持合わせていなかったもので、それについての評価を試みることはできなかったが、併しこの方も剣の腕前と同じことであろうと思った。一兵一卒を持たずして何の城取り、陣取りであるか！全国を旅して歩いたというが、それも怪しいものである。一度大膳自身が生れた小田原附近の地理人情について質問したことがあったが、勘助は口を噤んで一語も発しなかった。全然知っていないと見るより他はなかった。

青木大膳は、今日ゆくりなくも山本勘助が彼にぺてん師としての本性を示したことが、満足だった。安倍川の堤を、大膳は、いつもの場合とは違って、足ばやに歩いていた。

板垣信方を襲うということが、たとえそれが一つの芝居であるとしても、彼から久しぶりで退屈さを取り上げていた。ぺてん師め！世をうまく欺き通しているが、俺だけは欺けなかったではないか！

彼の歩いて行く道の片側は安倍川の磧、片側は一段低くなって、そこには耕されていない田野が広がっていた。今年は米は出来まい！この思いが、急に青木大膳の心を暗くした。米のこととなると、問題は切実だった。それでなくてさえ年々百姓が土地を棄てて流民になって行き、田を耕す者は少くなっている。今年はこの月の上旬、十日間に亘って、大雨が降り続いた。京都から東はどこも大変な水害である。この地方だけでもこの安倍川の川筋で流れた家の数は知れなかった。田圃も流れ、馬や牛も海へ向かって流れた。昨天

文九年にも、春に一度と、今年より少し遅れて秋口に一度大風雨があった。年々厭なことが続いて起っている。

甲斐へ仕官するか！ 甲斐の方が少しはましかも知れぬ。山本勘助と一緒に仕官することは気が重いが、併しあんなかたわ者でも、一人で見知らぬ他国へ行くよりは幾らか気強いかも知れぬ。

併し、厭だな、あいつは！ 青木大膳は、ふと足を停めた。どうしても嫌だと思った。彼自身人から例外なく嫌な人間と思われている男だったが、その彼が、山本勘助だけは嫌だった。彼は幼少の時、芋畠で青虫を石で潰し、地面にこすりつけたことがあったが、それでもしない限り、気持がおさまらぬようなものを、彼は盛名高いかたわの浪人者に感じた。

八月の初めだった。風はなかったが、ひんやりと夜気は冷たかった。秋の気が濃くなっている。

今川家の居館から程遠からぬところに、それを取巻

くように侍屋敷が配されてあるが、それが切れると、だらだら坂になって下町に続いている。この辺は屋は相当人通りが多いが、日暮時から全く人の通行は絶えてしまふ。集団をなす夜盗の群が、時折、足ばやに道を横切る許りである。道の両側の店舗もかたく表戸を閉ざしている。

青木大膳は、坂の途中にある大榎の傍に、もう小半刻も立っていた。ここを武田の重臣、板垣信方が通過するのを待っているのである。板垣は、四五年前甲斐をその子信玄に追われて今川に身を寄せている武田の前総帥信虎の御機嫌伺いに伺候し、夜分になって、やはり武田から信虎について派遣されている東雲半二郎の居宅へ帰る筈であった。青木大膳はその帰りを襲おうというつもりだった。

山本勘助とは今日は会っていない。併し、打合わせた場所は、間違ひなくこの坂の途中の大榎の下である。板垣の姿を見掛けるや、彼はいきなり横から跳び出して斬りかかる。供がいたら、二人でも三人でも斬